

御子柴先生を送る

吉田 陸

私が文学部に赴任したのは1999年4月のことで、間もなく12年になる。御子柴先生とはその時以来、普遍教育のロシア語教育と大学院〔(旧)文学研究科+社会文化学研究科→(新)人文社会科学研究科〕の研究指導の場でお付き合いさせていただいた。とはいえ部局も違い、先生の専門分野（ロシア宗教文化・思想・哲学史）と私のそれ（文化人類学、北方先住民研究）も遠いともいえないが近くもない、ということで、先生のことを「知っている」とは言えないのが真相である。ロシア語や大学院学務に関する短時間の打ち合わせを除けば、先生と長い時間お話をさせてもらったのは、大学界隈の居酒屋でたまたま杯を重ねた時くらいである。その私が送別のことを語るのは僭越に過ぎるが、共にロシア語を普遍教育で教えた後輩の同僚として、また大学院で同じセクションで共通の院生を教えた者として、これまでの思い出を交えて記すことにしたい。

私の赴任当初は、ロシア語教員には御子柴先生の他、木下豊房先生、そして荻原真子先生という陣容で、時にロシア人の先生も非常勤講師としてこれに加わった。私以外は、御子柴先生を含め各々の専門分野で高明な先生方ばかりであった。今思えば贅沢なロシア語教師陣であった。その後木下先生、そして荻原先生と大官が定年退職していかれ、最後の堡壘として奮闘されていた御子柴先生もついに定年退職の時を迎えられた。大変残念なことに、千葉大学普遍教育では、先生の後任を補充しないということである。以下に述べるような、ロシア語教育のみならず、ご専門のロシア思想研究分野における数少ない研究者としての先生の業績が評価されないことは極めて憂うべき事態であるが、ここではこのことには触れないことにする。

千葉大学における御子柴先生のご活動は、言語教育センター（旧外国語センター）におけるロシア語教育と、大学院における研究指導とがある。特に博士後期課程を修了し、博士号を取得する学生を輩出させたことは、先生の実力のみならず、学生指導と養成に高度なプロフェッショナルリズムを有していたことを証明している。残念ながら私はその先生と膝を詰めて仕事をした、ということはなかったもので、いざ先生の人となりについて語るのは躊躇するし、教育・ご指導の現場を覗いたこともないので、その方法がいかなるものか、批評したり感心したりもできない。ただ、ロシア語教育は、いつもご熱心に学生に相対していたという印象が強い。時折研究室で、つまり素面の状態で談笑する折に垣間見る先生の学生に対する姿勢から類推するに、表現は悪いが口角泡を飛ばしつつ、時に「窓はアクノー」（「窓」のロシア語をラテン文字表記すれば“OKNO”：語頭のOはアに近い発音）などとオヤジギャグを発しつつ、教壇を右往左往しつつ教えておられる姿が想像できるの

である。先生の本年度（2010年）前期のロシア語1のクラスは、半期1単位のみを履修する学生で膨れ上がった80名程度の履修生を抱えた授業だったそうだが、つい最近も、「ロシア語1の授業なんて、ありゃ肉体労働そのものだよ」などと愚痴っておられた。その一方で、そのような授業の後、運動の後のような爽快そうないでたちで廊下を闊歩している姿も目にしてきた。先生がオヤジギャグとパフォーマンス入りで教室を飛翔？しつつ教えるロシア語の授業風景を、こっそりこの目で確認しておくべきだったと思う。

ロシア語教育と同じかそれ以上に先生が熱心にされていたのが、大学院での学生指導・養成であったようだ。先生が出講される曜日（それは毎日では決していないが）には、研究室にはたいてい在学中の大学院の指導学生が在室していた。院生のいるところで学部学生の成績とか学務に関するきわどい話をするこもあった（先生の名誉のために付言すれば、肝心な時には学生に席をはずしてもらったのは勿論のことである）。学生がいない時も、先生は既に大学院を修了した学生の動静等について語るのが常であった。門下の学生を大変気遣っているご様子であった。研究室で気付いたことは、大学院生が先生に大変気安く話かけることである。これなどは先生の驕らない、偉ぶらない、寛容の精神の持ち主であることの証左であり、また親身になって学生を扱ってきたことの結果ともいえるだろう。しかし、今風に言えば「ため口」といっても良いような口調の学生すらいて、時にこちらが心配になるくらいであった。もっともこのことは私自身についても言えることで、いつも気安く対応して下さる先生には、随分失礼な口調で生意気なことも言ってきたに違いない（どうかお許し下さい）。

次に先生のご専門についての私見を述べさせていただきたい。先生のご専門はロシア宗教文化・思想史とでもいったらよいだろうか。私も前職も含めソ連・ロシアとの付き合いは短くないが、ロシアを思想的に捉えるのは至難の業であることを確信している。ロシアの現実を直視し、それを理解なり解釈すること自体の難しさを思えば、その哲学的、思想的側面を極める作業がどれほど困難かは想像の域すら出ない。その作業に果敢に挑戦して業績を残されているのが御子柴先生である。私は先生からご寄贈いただいた著作の一つ（『ロシア宗教思想史』成文社2003）を拝読させて頂いたにすぎず、業績について何らのコメントをする資格もない。ただ70年間続いたソ連期を含めた20世紀を通じて生き残り、今また新たな展開を示すロシア正教会を根幹とするロシアの宗教的状況（そこにはロシアの民間信仰・呪術や先住民族のシャマニズムなどもある）をみるに、先生が既存の哲学・思想研究に満足せずに、ロシア正教会を軸にロシア思想史を捉え直そうとされているその研究姿勢が大変有意義なものであるという推測は私にもできる。先生にはロシア哲学史に必ず名前を連ねる、ウラジーミル・ソロヴィヨフやニコライ・ベルジャエフについての論考も多く、これらの革命前後の時期の哲学者・思想家の研究も先生のご専門の柱の一つといえる。浅学な私にとっては、これらの思想家については、私自身のロシアでの博士候補資格取得のための哲学国家試験受験の際に、ほぼ一夜漬け状態で試験勉強をしたことを思い出すくらいである。

時に各界の旧ソ連研究者やロシア研究者が極めて安易に「ロシアとは何か？」という問

いを設定して、それに対する回答を試みることがある。西洋でも東洋でもないロシア、ヨーロッパでもアジアでもないロシア、あるいはヨーロッパ的要素とアジア的要素を併せ持ったロシア、そのロシアとは何か、という問いは、外国ロシア研究者にとって永遠の課題とも言える（ロシア人自身がこの問いにどの程度的確に答えられるかははなはだ疑問である）。そのような回答を準備するには、ロシアとの比較対象としての西欧についても、あるいはまた東方世界（中近東、コーカサス、内陸アジア～東アジア世界）についても、一定の知識が要求されるはずであるが、実はロシア自体についての知識や経験が最も必要であることは言うまでもない。巷間にはそのロシア自体について、不十分な認識しか持たない論考が多い。個人が自己の知見の範囲内で断片的に切り取ってきた「ロシア」を疑似相対化し（ようと）たものに過ぎないのである。現代日本のロシア研究者の中でも、時代そして思想的な深奥からロシアを捉えようとされてきた（と私には思われる）御子柴先生こそ、「ロシアとは何か？」という問いに対する回答を試みてほしいと願っている。

先生はここ数年、ご健康の方が十分ではないと仰っておられる。とはいえ、酒の席では同僚の、あるいはロシアでの話の端々にしばしば異性の話（それも美人の話―「誰かの知人がえれえ美人で…」という具合に）なども織り込まれてくるところから類推するに、まだまだお元気そうである。研究上のバイタリティも十分お持ちのはずであるから、今後の更なる学問的發展を祈念して、送別のことばに代えさせて頂きたい。